様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年 6 月 1 日現在

機関番号：14301
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22820036
研究課題名（和文）　イタリアの精神保健実践における生態学的インタラクション環境の文化生態人類学的研究
研究課題名（英文）　Cultural ecological anthropological studies on ecological interaction environment in mental health practices in Italy
研究代表者
松嶋　健（MATSUSHIMA TAKESHI）
京都大学・人文科学研究所・研究員
研究者番号：40580882

研究成果の概要（和文）：本研究では、精神科病院を全廃して地域精神医療サービスに移行したイタリアにおいて、インタラクションの視点からどのような実践が行われているのかを検証した。そこでは狭義の精神医療をこえて、「生きもの」としての人間が他の人々や環境とのインタラクションのなかで、自らの「テリトリー」を創出していく過程が見出される。本研究では文化人類学および生態心理学の観点から、このような＜生態学的インタラクション環境＞の諸特徴について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study has examined from an interactive point of view how psychiatric practices are carried out in Italy where all the psychiatric hospital was abolished and was changed to community services. It is found that a process to create "territory" doing interacitons with other people and environment as an living being beyond psychiatry in a narrow sense. Drawing on a cultural anthropological and ecological psychological perspectives, this research has illuminated various characteristics of "ecological interaction environment".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,130,000	339,000	1,469,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,230,000	669,000	2,899,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：精神医療・イタリア・生態心理学・インタラクション・文化人類学・テリトリー・バザーリア

１．研究開始当初の背景

近年日本では、精神障がい者の社会的入院が問題とされ、できるだけ病院の外に出す「脱施設化」の方向が目指されてきた。一方イタリアは、精神保健分野において世界でも

画期的な試みをしたことで知られる。1978年5月に制定された法律180号（通称「バザーリア法」）によって新規入院と新規病院の建設を禁止した後、約20年かけて全土の公立精神科病院を閉鎖し、地域精神医療に完全に移行したのである。

しかしそれは単に病院の中で行われていた「医療」が、地域に出たということにとどまらない。特に精神科医のフランコ・バザーリア（Franco Basaglia）を中心に1960年代以降生じた精神保健改革の現場を見ると、「脱施設化」という概念で捉えるだけでは不十分であることが見えてくる。精神障がい者を病院の外に出して脱施設化したとしても、その外がどんな場所なのかは自明ではないし、そこがまた「施設化」する可能性は常にある。イタリアでバザーリアたちが問題にしたのが精神病院の「壁」ではなくその「論理」だったというのも、精神科病院をなくしたとしても生じうる「施設化」の論理とは別の論理を開くことを目ざしていたからである。

「脱施設化」というのは、あくまでも「自立した個」という考えを基礎にしているが、イタリアの経験から見えてくるのは、個の「自立」よりもまず、行きていくために必要な関係性の場の創出が目ざされていたということである。ただ「関係性」や「つながり」と言ってもそれはどのような内実を持っているのかを明らかにしなければ不十分である。ここに関係性やつながりを、具体的な実践の場のやりとりの中で見ていく必要が出てくる。「インタラクション」の観点の必要性はここから要請される。

そこで、アメリカや北欧の「脱施設化」と比べて、とりわけ特異な道を選んだイタリアにおいて、実際にどのような精神保健実践が行われているのかを文化人類学的に調査するとともに、それを特にインタラクションの観点から分析することが重要であると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は、公立精神科病院を全廃したイタリアにおける地域精神保健実践のフィールド調査を通じて、その制度的側面および日常の実践の側面を明らかにすることである。地域で暮らす個々の精神障がい者とその周囲の人々が具体的にどのように「生活」を構築しているのかを特にそのインタラクションの次元に注目しながら記述するとともに、そこから彼らに特徴的な「やり方（modo di fare）」を取り出し分析する。

３．研究の方法

本研究で導入される概念である＜生態学的インタラクション環境（ecological interaction environment）＞とは、必ずしも会話などの明確なコミュニケーションが行われていない場合も含め、精神障がい者を含む人々が共在し、仕事やその他の活動が行われている場のことであり、そこには人間同士のインタラクションや他の人間の活動だけではなく、活動を取り巻き、これに関わっている可能性のある自然や人工物などの環境も含まれる。

人類学において精神科病院やその周辺施設を舞台としたエスノグラフィーは幾つもあるが、なかでも重要なのは、社会学者のE.ゴフマンによる『アサイラム』（1961年）である。そこで提示された「全制的施設（total institution）」という概念の重要性は、ゴフマンの別の概念「焦点の定まっていないインタラクション(unfocused interaction)」という概念と対置されることでより浮き彫りになる。振舞いや関係性が一義的に定められている場所と、より高い自由度が許容されている場所におけるやりとりの違いである。これを踏まえ、目的や意図をもった伝達を意味する「コミュニケーション」よりも広い観点から「インタラクション」というものに注目することで、場や環境の問題も含めて扱うことが可能になる。

このような視座から＜生態学インタラクション環境＞の概念を導入し調査を行う。具体的には、イタリアのいくつかの州の地域精神医療サービスにおいて、グループホーム、精神保健センター、社会協同組合などで参与観察と聞き取り調査を実施する。また精神科病院時代とのインタラクションの変化を知るために、病院があった時代を知るスタッフにも可能なかぎり、インタビュー調査を行う。

さらにこれに加えて、インタラクションに関わる文献研究を行う。そこでは医療人類学における精神医療論に加えて、生態心理学の考え方やコミュニケーション論などを参照する。

４．研究成果

公立精神科病院をすべて閉鎖したイタリアでは、病院にいた患者だけが地域に出たのではなく、医師も看護師も含めてスタッフ全員が外に出たわけであるが、そこでは病院のなかとは全く異なる働き方が必要になる。

一見、医療行為とは見えないような日常的な様々なこと（家に訪問して話をするとか、仕事を探す、住むところを探すといったことまで）を地域精神保健サービスの利用者と一緒に行うことを通して、利用者が環境を探索し、そのなかに潜在的にあるリソースを利用して、自らが生きる持続的な関係性の場としての生態学的ニッチを作り上げる作業が共

同で行われている。それはイタリア語で「地域」を意味する "territorio" すなわち「テリトリー」の創出の過程である。

そこでのインタラクションの特徴の一つとして、「他人のアフォーダンスの利用」ということが挙げられる。生態心理学者の J.ギブソンが指摘したように、「環境の最も豊かで精緻なアフォーダンスは、他の動物によって、そして我々人間の場合には他人によって与えられる」のであり、利用者は看護師や教育士（educatore）と一緒に何かをすることで、彼らの知覚を参照点とし、「他人のアフォーダンス」を通した学習を行っていると言える。

またこのことの延長上でさらに、「自分についての他人のアフォーダンス」を通して、自らの行為を決定していくということが可能となっているケースもいくつか見られた。それは単に、他者のパースペクティヴを学習し取り込むというにとどまらない側面がある。そうではなく、自分たちが日常的に生きている複数のパースペクティヴが、他人たちとのやりとりのなかで、コンテクストが限定されることによって具体的な行為が発明されるということである。

そこでは最早、行為の主体は本人だと言うことは不可能であり、行為は他人たちとの「あいだ」に創発する。ここに、「他人たちと共に在る」ことの重要性の一つがあり、「関係性」や「つながり」ということの一つの実践的な意味があると言えよう。

こうしてそこに＜顔＞のある関係性が時間をかけて生まれていくわけであるが、イタリアの地域精神保健サービスは、公共サービスでありながら、その土台は、＜顔＞のある個々の具体的な人間のやりとりによって支えられている。そこでは、「施設」そのものを充実させようという方向性は採られず、「施設」における刺激はなるべく少なくし、逆に時間をかけて関係性を作り上げていくことを可能にするような＜生態学的インタラクション環境＞の方に重点が置かれている。

しかし同時に、精神医療改革以来追求され育まれてきたこのような彼らの「やり方」も現在、経済合理主義やグローバル製薬産業の浸透のなかで様々な矛盾に直面している。そこでは専門化といったような別の形での「施設化」の危険が常にあり、それに対して今後イタリアの精神保健がどちらに向かうかについても注視していく必要があるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①松嶋健, 「フランコ・バザーリアとイタリアの精神医療改革」, 『社会情報』, vol.21-1, 2011 年, pp.63-76, 査読無

〔学会発表〕（計 4 件）

①松嶋健, 「底の抜けた「現実」をつなぎとめる―イタリアの精神保健の経験から」, CARLS 医療人類学特殊研究セミナー, 2012 年 3 月 9 日, 慶應義塾大学

②松嶋健, 「アクターからパフォーマーへ―イタリアの地域精神保健と演劇人類学の出会いから」, 日本文化人類学会, 2011 年 6 月 12 日, 法政大学

③松嶋健, 岡本雅史, 「制度・コミュニケーション・出来事―＜やりとり＞と＜かかわり＞から精神障害を捉える視座を索めて」, DCG シンポジウム「精神医療現場から日常生活にわたる制度的コミュニケーションギャップをめぐって」, 2010 年 11 月 14 日, キャンパス・イノベーションセンター東京

④松嶋健, 「＜生成変化する役割＞と＜出来事の意味＞―イタリア中部のカーサ・ファミリアの事例から」, 社会言語科学会, 2010 年 9 月 5 日, 大阪大学

〔図書〕（計 2 件）

①山川百合子・栗原加代（編）, 松嶋健ほか, 医学出版社,『看護ポケットマニュアル 精神科』2012 年, 124 頁（17-18）

②菅原和孝（編）, 松嶋健ほか, 世界思想社,『身体化の人類学―認知・表象・言語・社会』2012 年（出版予定）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
松嶋　健（MATSUSHIMA TAKESHI）
京都大学・人文科学研究所・研究員
研究者番号：40580882

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：